

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593495

研究課題名(和文)パーキンソン病高齢者の家族介護者を中心とした在宅療養生活支援プログラムの開発

研究課題名(英文)Development of a home care support program focusing on family caregivers of elderly individuals with Parkinson's disease

研究代表者

富安 真理 (Tomiyasu, Mari)

静岡県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：50367588

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：【目的】廃用症候群改善のための看護技術を、パーキンソン病高齢者を介護する家族を中心とした在宅療養支援プログラムに再構成し、プログラム実施及び評価を行うことである。【方法】研究参加に同意した家族介護者14名に対し、1群事前事後テストデザインでプログラムを行った。実施と調査に協力を得られた9名を分析対象とした。【結果】対象者の平均自己管理スキル得点は、実施前27.4点で実施後は30.7点であり、介入後の得点が有意に高かった($t=-2.956, df=8, p<.01$)。【結論】本プログラムは家族介護者の自己管理スキル向上に効果があり、家族が必要とする支援として訪問看護に活用できる可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：Objectives: To reintegrate nursing techniques for mitigating disuse syndrome into a home care support program focusing on the family caregivers of elderly individuals with Parkinson's disease, and to implement and evaluate this program. Methods: The program was implemented using a single-cohort, before-and-after test design on 14 family caregivers who provided their informed consent to participate in the study. The analysis set consisted of the 9 family caregivers who consented to participate in both the program's implementation and a survey. Results: The mean self-management skill score of participants was 27.4 before and 30.7 after implementing the program, indicating that the score was significantly higher after intervention ($t = -2.956, df = 8, p < .01$). Conclusion: This program was effective in improving the self-management skills of family caregivers, suggesting that it could be used by visiting nurses to provide the necessary support to families.

研究分野：訪問看護・在宅看護

キーワード：訪問看護 パーキンソン病 家族介護者 療養生活支援

1. 研究開始当初の背景

平成 18 年以降、医療制度改革の推進に伴い、入院は急性期の短期間に限られ、医療を必要としながら在宅療養生活を送る高齢者が増えている。また、療養者が医療的管理を必要とする状態になると、多くの場合、家族介護者は生活困難に遭遇し、療養者は在宅療養継続が困難になることが報告されている¹⁻²⁾。特に、神経難病においては、その疾患特性として、慢性的に進行し、障がいが著しく、在宅療養が長期化するため、家族介護者の介護上の困難が大きいとの報告がある³⁻⁴⁾。たとえば、医療が必要であったとしても、高齢者の生理的ニーズを充足し、自分らしく住み慣れたまちで暮らせることを、自らが選択できることは重要である。

しかしながら、我が国における 65 歳以上の者がいる世帯は全世帯の 41.9% を占め、世帯構造別にみると、「夫婦のみの世帯」が最も多く、家族介護者もまた高齢者である場合が多い⁵⁾。このような療養環境の下、介護保険制度の導入効果については、家族介護者の負担を軽減したことを示す実証的根拠は少なく⁶⁾、家族介護者への必要な援助の開発や提供が指摘されている⁷⁾。

パーキンソン病療養者の QOL に関する研究⁸⁾⁻¹⁰⁾は、近年行われるようになったが、家族介護者の QOL や生活の課題および課題解決のための方策については、研究が少ない現状である。そこで、研究代表者である富安は、博士課程において進行期にあるパーキンソン病高齢者の介護を担う家族 16 名の生活実態および生活課題を調査した。生活実態については、家族の健康関連 QOL を測定する SF-36v2¹¹⁾ 下位尺度平均得点について、2007 年国民標準値(60 代)の値と比較すると、身体機能 45.8 点、全体的健康感 48.2 点は、ほぼ同様の結果を示した。しかしながら、日常役割機能(身体) 36.4 点、活力 42.1 点、心の健康 41.8 点は、平均値より 10 点差の低い値を示した。また、昼食支援時間調査における、昼食支援時間は、157.7±45.2 分であり、昼食摂取時間は、25.3±17.0 分であった。家族介護者による食事支援の特徴は、「食事を安全に支援する」「環境を整備する」「摂食への負の影響要因を考えて支援する」といった 3 項目に時間がかかり、時間の範囲が広く療養者の個別性がケアに反映され、家族介護者の負担増加が示された。さらに、家族介護者の生活課題 4 領域【薬効のある時間帯に生活行動を支える】【健康・経済的に疲弊する】【家族喪失の予期悲嘆に直面する】【在宅ケアの全責任を感じつつ在宅療養を支える】の関連性をモデル化した¹²⁻¹³⁾。食事支援において【薬効のある時間帯に生活行動を支える】ことは、療養者の生活機能低下予防につながり、家族介護者の負担軽減、健康関連 QOL の向上に影響を及ぼす可能性が示唆された。

この研究成果を踏まえ、進行期にあるパーキンソン病高齢者の家族介護者の生活課題

に対応し、生活実態である家族介護者の心身の負担軽減に貢献するプログラム開発
① OFF の時間増加に伴う廃用性症候群の改善を目的とした【薬効のある時間帯に生活行動を支える】家族介護者の主体的取り組みへの訪問看護による在宅療養支援、②多職種連携による家族介護者への助言、の着想を得た。

文献

- 1) 牛込三和子, 江澤和江, 小倉朗子他(2001). 神経系難病における在宅療養継続に関連する要因の研究, 日本公衆衛生学会誌, 47(3), 204-215.
- 2) 綾部秋絵(2007). 要介護高齢者の在宅生活継続に関する影響要因とケアの視点, 日本看護科学会, 27(2), 43-52.
- 3) 牛込三和子, 川村佐和子, 大野ゆう子(1993). 患者側からみた東京都難病施策の利用状況と今後の展望, 特殊疾病(難病)に関する研究報告書, 249-270.
- 4) 牛久保美津子, 川村佐和子, 稲葉裕他(1998). 東京都における神経系難病患者の在宅ケアの特性—3 疾患別による分析—, 日本公衆衛生雑誌, 45(7), 653-663.
- 5) 厚生労働省(2010). 平成 22 年度国民生活基礎調査の概況 2011 年 7 月 12 日
- 6) Nanako Taniya, Haruko Noguchi, Akihiro Nishi (2011). Population aging and wellbeing: lessons from Japan's long-term care insurance policy, THE LANCET Japan: Universal Health Care at 50 Years, 48-57.
- 7) 平成 21 年度 老人保健健康増進等. 事業『地域包括ケア研究会 報告書』平成 22 年 3 月
- 8) 小寺さやか, 岡本玲子(2007). 軽症期にある在宅神経難病患者の生活を編み直す頑張り—パーキンソン病と脊髄変性症患者の長期療養に向けて—, 日本地域看護学会誌, 9(2), 46-52.
- 9) 秋山智, 岡本裕子(2010). 若年性パーキンソン病患者の QOL に関する研究, ~ SEIQoL-DW による評価~, 日本難病看護学会誌, 14(3), 169-177.
- 10) 大生定義(2005). Parkinson 病の QOL 評価, Annual Review 神経 2005, 199-134.
- 11) 福原俊一, 鈴鴨よしみ(2005). 健康関連 QOL 尺度-SF-8 と SF-36, 医学の歩み, 213(2), 133-136.
- 12) 富安眞理(2011). 高齢パーキンソン病療養者の摂食・嚥下障がい支援を行う家族介護者の生活課題に関する研究, 聖隷クリストファー大学大学院保健科学研究科 博士論文.
- 13) 富安眞理, 藤森まり子, 辻郁(2011). 高齢パーキンソン療養者の家族ケアに関する研究—家族介護者に対する生活時間調査分析から—2009 年度(財)在宅医療助成 勇美記念財団 在宅医療助成(一般公募)完了報告書.

2. 研究の目的

廃用症候群改善のための看護技術（紙屋, 2011）を、パーキンソン病高齢者を介護する家族を中心とした在宅療養生活支援プログラムに再構成し、プログラムの実施及び評価を行うことである。

3. 研究の方法

プログラム実施後の評価は、自己管理スキル尺度（以下, SMS 尺度）を用いて家族介護者の自己管理スキル向上の効果について検討した。また、グループインタビューから家族介護者のプログラム継続に影響を及ぼす実現要因も検討を行った。

1) 研究デザイン：1 群事前事後テストデザイン 2) 対象者：患者会主催の研修会に参加し、研究に同意した家族介護者 14 人 3) データ収集方法：平成 25 年 11 月及び平成 26 年 1 月に、2 回実施された研修会にて、生活支援技術セミナーを受講した看護師が、運動プログラム（ムーブメントプログラム）を説明した（図 1）。自宅において起床時の体幹の回施運動（5 分）と体が動きやすい時間帯の足踏み運動（3 分）のプログラム内容を 4 週間行うこと、症状日誌の記載について本人と家族に依頼した。プログラム実施前後に会場にてアンケート調査を行った。期間中、1 週間毎に調査担当者が電話での聞き取りと、プログラム終了後に、家族介護者のグループインタビューを行った。4) 倫理的配慮：調査担当者の所属機関倫理委員会へ申請し承認を受け、それを順守し行った。

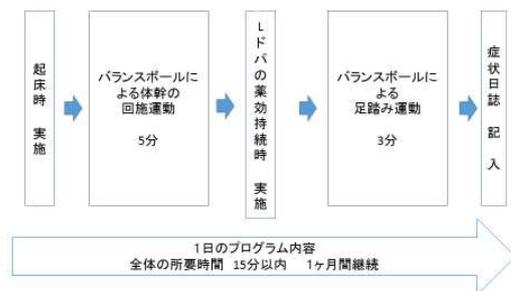


図1 ムーブメントプログラム実施手順



バランスボールを活用した足踏み運動の実際(3分)

4. 研究成果

本研究に同意した家族介護者 14 人中、途中脱落者を除いた者は 9 人（女性 6 人、男性 3 人、配偶者 7 人、子 2 人）であった。平均年齢は配偶者 65.4 歳（標準偏差 9.34）、子 41.0 歳（標準偏差 11.0）であった。PD 療養者 9 人（女性 6 人、男性 3 人、ヤールⅡ 1 人、Ⅲ 6 人、未申請 2 人）の平均年齢は 66.24 歳（標準偏差 9.59）であり、PD 療養者の多くが運動障害に伴う生活上の課題を有していた。平均 SMS 尺度得点は実施前 27.4 点で実施後は 30.7 点であった。分散を確認後対応のある t 検定（両側）分析した結果、介入後の SMS 得点が有意に高かった（ $t=-2.956, df=8, p<.01$ ）。また、思考の操作により自分自身を励ますような情緒的なスキルを示す「しなくてはならないことよりも楽しいことを先にしてしまう」（ $t=-2.80, df=8, p<.05$ ）「自分ならできるはずだと心の中で自分を励ます」質問項目において介入後の SMS 得点が有意に高かった（ $t=-2.53, df=8, p<.05$ ）。このことから、本プログラムは家族介護者の自己管理スキル向上に効果があり、家族が必要とする支援として訪問看護に活用できる可能性が示唆された。

また、グループインタビューの結果から家族介護者のプログラム継続に影響を及ぼす実現要因[近接性][効果の手応え][安全の確保]の 3 カテゴリおよび 12 サブカテゴリが抽出された（表 1）。

表 1 家族介護者のプログラム継続に影響を及ぼす実現要因

カテゴリ	サブカテゴリ
保健資源の使いやすさ (近接性)	体を温める環境調整を行う
	習慣化された運動にたすことができる
	ボールが生活環境に馴染む
	気負わず運動を見守ることができる
効果の手応え	家族介護者もムーブメントプログラムを行う
	ストレッチの効果を家族介護者も体験する
	ボールにあわせて運動できる
	朝から発声練習になる。
安全の確保	自主的に運動に取り組むことができる
	気持ちよさを体験する
	60%の空気を入れたバランスボールは安定感がある
	膨らんだボールは事故原因となる

加齢に伴う身体機能の低下と薬効の減弱化による障害をあわせもつ PD 療養者を介護する家族の負担は大きい。PD は介護が必要になる原因割合のうち 3.2%を占めており（平成 22 年国民生活基礎調査）、こうした療養生活の下、家族介護者への必要な援助の開発や提供が指摘されている。本研究において、家族介護者の負担を増加させることなく、PD 療養者のプログラムを継続することについて評価を得ることができたと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1) 富安 眞理, 鈴木 桜子, 川村 佐和子 (2013) パーキンソン病高齢者の家族介護者が行う介護に関する検討-喀痰吸引を必要とする時期に焦点をあてて-, 日本難病看護学会誌, 17-3, 219-227.

〔学会発表〕(計 6 件)

1) 今福恵子, 富安眞理, 森野智子, 紙屋克子 (2014) パーキンソン病療養者を対象とした運動プログラムにおける肯定的表現の分析テキストマイニングを活用して, せいれい看護学会誌, 5-1, 34.

2) 富安 眞理, 紙屋 克子, 今福 恵子, 森野智子(2014) パーキンソン病療養者を中心としたバランスボールを用いた運動プログラム普及活動とその評価, せいれい看護学会誌, 5-1, 33.

3) 今福 恵子, 富安 眞理(2014) パーキンソン病療養者に対するバランスボールを活用した運動プログラム結果-若年性パーキンソン病療養者1名のインタビュー結果から-, 日本難病看護学会誌, 19-1, 91.

4) 富安 眞理, 今福 恵子, 森野 智子 (2014) パーキンソン病療養者の在宅療養生活を支える家族介護者の自己管理スキルに関する検討, 日本健康教育学会誌, 22-1, 57.

5) 森野 智子, 富安 眞理, 今福 恵子, 紙屋 克子 (2013) パーキンソン病在宅療養者QOL 維持・向上のための「口腔に関する情報シート」の開発, 日本公衆衛生学会総会抄録集, 474.

6) 富安 眞理, 紙屋 克子, 森野 智子, 今福 恵子 (2013) パーキンソン病患者を中心としたムーブメントプログラムが在宅療養生活に及ぼす影響, せいれい看護学会誌, 3-2, 16.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

富安眞理(トミヤスマリ)

静岡県立大学 看護学部・准教授

研究者番号：50367588

(2) 研究分担者

森野智子 (モリノトモコ)

静岡県立大学短期大学部歯科衛生学科・講師

研究者番号：20582703

今福恵子 (イマフクケイコ)

静岡県立大学短期大学部看護学科・講師

研究者番号：80342088

紙屋克子(カミヤカツコ)

静岡県立大学 看護学部・客員研究員

研究者番号：90272202